

認知症本人大使「希望大使」の任命について

令和6年1月に施行された「共生社会の実現を推進するための認知症基本法」及び同年12月に策定された「認知症施策推進基本計画」にて、共生社会の実現を推進するために「新しい認知症観」などの必要な認知症に関する正しい知識及び認知症の人に関する正しい理解を深めることができるよう、認知症の人に関する国民の理解の増進等に関する施策を講ずるものとされており、年代・性別のほか地域性も考慮して、以下の7名を「希望大使」として任命
※令和8年1月20日を以て任期が満了することに伴う再任(7名)。

名 称

「希望大使」

用務内容

- 認知症理解のための普及啓発に関する業務として、以下の用務を想定

- ①国が行う認知症の普及啓発活動への参加・協力
- ②国際的な会合への参加・希望宣言の紹介等
- ③その他
- ④なお、具体的な用務については、任命した希望大使と当課職員と相談のうえ、検討するものとする。

任 期

- 任命日より2年間
(任期途中の退任及び任期満了後の再任は妨げない)

任命時期

令和8年1月21日(水)

※前回任命日: 令和6年1月21日(日)

戸上 守(とうえ まもる)

大分県在住、65歳。
38年間、地方公務員の仕事をしていたが、56歳頃からもの忘れの症状と体調不良があり、前頭側頭型認知症と診断される。その後、退職。2021年から、大分県希望大使。



・診断後は落ち込み、ひきこもったが、大分市で若年性認知症の人たち一人ひとりが力を活かしながら楽しく活躍する大分市のデイサービスにつながったことで「自分」を取り戻す。
・現在もデイサービスに通いながら、同社が立ち上げた事業所で運輸関係の仕事にも従事。
・もともとは話し下手だったが「一人でも元気になる人が増えてほしい」「認知症があってもなくても同じ社会の一員としてともに暮らせる地域をつくっていきたい」と県内外で自分の体験と日々の活動を発信。大分県の認知症のピアサポート事業の相談員として、県内の全市町村に出向いて仲間を勇気づけている。

藤田 和子 (ふじた かずこ)

鳥取県鳥取市在住、64歳。
看護師として働いていた45歳の時、若年性アルツハイマー病と診断される。現在、「一般社団法人 日本認知症 本人ワーキンググループ」相談役理事。



「認知症になっても自分らしく暮らせる地域にしたい、そんな地域をつくりたい」と考え、18年前から地元で活動を続けている。これからもその活動の輪を広げていくために、全国各地で「認知症とともに生きる希望宣言」を伝えている。自分自身の認知症の状態とむきあいながら、各地の本人たちが前向きに生き、仲間をつくり、社会に参加・参画していくことの後押しをしている。

鈴木 貴美江(すずき きみえ)

京都府在住、86歳。
1969年頃から夫が立ち上げた呉服工房の経理を担当。義母が認知症を発症、夫も二度の脳梗塞後遺症で高次脳機能障害を発症し、2人の介護を長女と共に担った。義母、夫を看取った後、75歳で軽度認知症(シギン顆粒性認知症)と診断される。2022年から、京都府認知症応援大使。



・診断後、引きこもりがちになったが、主治医より認知症カフェの手伝いを勧められ、京都・岩倉地域での農作業・マルシェなどに参加、現在の活動につながった。
・オレンジカフェやワークショップの集まりでは、他の地域にも出張して挽きたてのドリップコーヒーを提供したり、地元でも居場所作りに奮闘している。認知症サポーター養成講座での発信も行っている。
・自転車に乗ることを目標に、練習した初日にこれを達成。その後、ボーリングなど、楽しみながら、次々とチャレンジしている。
「誰かのお役に立つ事が私の元気の源になっています。周りのみなさんに支えて頂き今とても幸せで、感謝の気持ちで一杯です」

渡邊 康平(わたなべ やすひら)

香川県観音寺市在住 83歳。
日本電信電話公社(現NTT)の機械課職員、50歳から観音寺民主商工会に勤務。72歳で認知症と診断される。



2017年6月から三豊市立西香川病院の非常勤相談員として勤務。院内の認知症カフェ(オレンジカフェ)に通う当事者の認知症を抱えながら生きる不安や悩みを聴き、自分らしく生きる姿をみせながら、認知症になってもよりよく生きるための支援をしている。年齢を重ね、遠方へいくことが難しくなったが、地元、観音寺市の本人ミーティングや地域活動に当事者として参加。言葉だけでなく、認知症とともに暮らす日々の姿をさまざまな形で伝えることで新しい認知症観の理解への地域貢献につなげている。

丹野 智文 (たんの ともふみ)

宮城県仙台市在住、51歳。
自動車販売会社でセールスマンとして活躍していた39歳の時、若年性アルツハイマー型認知症と診断される。



2015年から、認知症の本人が自身の体験や経験をもとに、当事者の相談を受ける「おれんじドア」を地元の仲間と行っている。国内だけではなく、国際アルツハイマー病協会(ADI)国際会議等にも積極的に参加。
「できることを奪わないで欲しい」こと、「本人だからできることがある」ことを社会に発信している。

春原 治子 (すのはら はるこ)

長野県上田市在住、82歳。
教職を定年退職後、民生委員、放課後児童クラブや特養のボランティア活動、自治会の高齢者サロンの運営に携わる。認知症になる前から、地域の地域づくりセミナーで認知症になっても前向きに活躍している当事者達を知る。
73歳の時、アルツハイマー型認知症と診断され、公表。



「私自身、物忘れが進みましたが、より良く生きたいとか、やりたい事とか、人を思う気持ちは変わりません。特養に入所中の方とも交流してきましたが、分かり合うことが出来ました。言葉が出にくくなって認知症が重度になっても、自分が持っている大切なものは失われないということがよく分かりました。だから、ありのままの自分を受け入れて、堂々と生きていきたいと思います。」(認知症相談にて)
「自分らしく生きるためには、『閉じこもらない』ことです。そのためには、地域づくりが大事です。私には、同じ学びをした地域の仲間が大勢いるので、安心して暮らせます。」(認知症講演会にて)

柿下 秋男 (かきた あきお)

東京都品川区在住、72歳。
大学(東京教育大学(現筑波大学))在学中、モントリオールオリンピックに出場。青果会社で職中にMCIと診断を受け、1年半後、62歳で退職。診断後に出会った地元の仲間たちと、楽しく、自分らしく、元気をモットーに活動をしている。



退職後、「みんなの談義所しなぐわ」との出会いをきっかけに、地域の仲間と一緒に、ミーティングセンターめだかの会、デニーズでの本人ミーティング等の活動を行ってきた。仲間がいればやりたいことが叶えられる。みんなでやれば楽しい。病院のデイケアの芸術療法から始まったアート活動もライフワークのひとつ。アトリエに定期的に通り、仲間とともにアートコミュニケーション。2025年冬には個展も開催した。
活動を通じてあたまでできた、いつでも、どこでも、だれでも、気楽に集まれる居場所「ごっちゃやま」を2025年8月にオープン。カフェの営業をしながら、さまざまな人が出会い、つながり、新たな可能性を広げていこうと、仲間と楽しんでチャレンジしている。

認知症の人本人が自らの言葉で語り、認知症になっても希望を持って前を向いて暮らすことができている姿等を積極的に発信